あ月め所自身ちやうちんのほうめうく所書
判をさくらまき張所黒印と云ふ御判の上
てくすり所自分は押印無に此芳到るく接よ
委穿鑿を加事ひりよくれさめ置
よと所意くくや床机をはきふれ云無
く事

一
彦右衛門宮云衛勘八さか又二三人と人数
引分く五隊と立てて自分は下知のす
を聞小附刺を移りれを表もものくと
昭方よ朱れくくよ絞ひりを也ひと
うに見えくさる事

一
所さる所ひりの人くれさ物以下所境
云無に霧り西のこう也ぬよめき来りくを
所さるめひりの所物以下こかをひくされは
はを旗きぬくをひくくとはさやう小見ゑれ
のりれまきはは頻り小京れかくへ吹麾
中くを所境云無所心地よけ小見えさ也
弱く事

一三吉武蔵守殿小出播磨守殿付者人と被
仰渡候ハ、ものゝ如く乍恐ものゝ如く作法仕候ハ一国
平定之事不申に付二人陣場より弾薬作陣合
戦目出度お祝さまつり候付者人雑談致
候内乃至相済候かゝ之事に御座候中に御座候ハ
人〳〵相重まゝて居候と聞え中候
其次第者合戦之事に御座候ハ陣袋相
済前所之川〳〵と申候者中城中小
家一宇も残さず相焼拂人〳〵陣場迄
後つゝゝ申候ハ同御度お祝さまつり候ゝ両
人相手被雑談仕候お聞え中に事

一
宗後足軽に成候人数之内を之陣場
に鉄炮大将先手中村孫平次宗次堀尾茂助
見者西年出雲拝領仕候堀尾帯刀殿事
相済宗家に成候事如軍法次第〳〵
に成候内に事

一
御馬より三町程先々信勝様秀吉様馬の
口に足小姓久左衛門宗弟に伽成申候と

相聞之中候事

一 御馬より出候八町計迄も御伴と見て御舎者
羽柴小一郎殿後ハ大和大納言殿と申候
事

一 津の国堺に御陣入れ申候事再三に能登守
上と被申候ハ中川瀬兵衛八ヶ条か
迄ふる出息女と先々たく見き人質心安
お見えと申候きて次に高槻より高山右近見え
同年程なく子息一人先々たく人質心安

見えと申候きく〳〵見物度御上洛とてなの出
源と見えと申候時元年中上に儀を惟任日向守
運に成きとて御かく御見て中によくふるまい
安土の御城に所下金銀をかけたうう物
をを宮殿住にて所下候と事に去かうに
秀吉様御上洛と承をを早〳〵山崎の津の
南国遍まきく只今をを入る中と中霧
如案正龍寺より物花見て中と注進方より
出産之事

一 秀吉御意ヲハ両所ハ人質ヲヤリ入不中候ヲ子細ヲ垂道者の光秀ニ同心ヲ有ましくハ幼少ヲ子ヲ殺ヲ様ニ被成ハ人質ヲ城ヘハ返ノ事

一 中川瀬兵衛殿高山右近殿ハ高槻ヲ不法川業二三人ハ能ヲ兵ヲ所ノ人数押合五六ヲ相見ヲ中作西ヲ北知ル所御通ハ時御能ヲ兵粮ヲ下馬ヲ乞ヲ丈ヲ所ヲ知ハ聞ヲ中ハ事

一 長崎ヲ御着ヲ被ヲ祝寿ハ為ヲ記ヲ所ヲ尋ヲ寄ヲ小寺一ツ寄ヲ生ヲ御孫ヲ注拵暫ハ中ヲ被ヲ閉ヲ上様ヲ御切腹の通備中高松ヘ注進ヲ射ヲ精進ヲ申ヲ門ヲ出ヲ被ヲ仕ハ中ヲ敬ヲ中ヲ程近ク羅紗作上ハ可及合義ヲ也事寄ヲ以中ヲ猶中ヲ相違力ヲ中作ヲ覚作精進ヲ立ヲ御奉公ハ力ヲ鑓ヲ

此度之皆精進を以たちまち結果しく候そして
之次と墓所元に魚鳥可結祖料理仕我前人
出をよりしハ真宗主代僧とよしおせそして所行
水戒を我所之しと相違きを以信勝ハ之母と
之暫之事ハ之くしく皆世間と後みしかくちや
せんと驚き紀と切と人を所意と知ハ久を所後
もき母と可暫と持中と愛と信勝と同前ハ
驚定所切と人と所教訓ハ之しうは信勝
所同若孫祈とお定之事

右之所之しをうみ子ハ包ませ三人の所ハをと
仏前ハ所ハ杉さめ結果使子ハ作出之事を
合義利運ハ成之を云拾石地末代仕立子ハ
杉ハ之付を代暫の時皆引出之しし可中ハ為
を御留ハ所祝のためにそく金子三枚を
老後運之ハ彼五千石ハ地　所祈様の所代
子を今迄も無為とおせえ中作子
所勝を施ハ之て所盃と信勝ハ出さしし結果ハ
所意子ハ惟任日向守親の如く記又を主の

明智光秀ハ羽柴秀吉ハ毛利ヲ討ント
欲シ之ヲ聞テ秀吉討死ヲ定作トノ所意
ヲ以テ盃ヲ取ル事

一
瀬田ノ山岡筒井順慶ハ京中ヨリ北ノ方ヘ
ヲ素性任安ノ城ニ打通ル上下見及ヒ
上様御切腹ノ本能寺ヨリ小河ヲ手
ヲ切ヲ京中作ヘ之ヲ二条ノ御所城ヲ
取ヲ小河手押入ヲ出シ火花ヲ散
シ大ノ所義ヲ人惟任者ヲ数ヲ出ス

手ヲ切死人数多出ルト聞ヘ中作ヲ
日向ヲ馬迴ヲ走ル
作ハ馳走可中上ルト如ノ様ノ文我乃注ヲ状
領ヲ二ハ作ト文ヲ中ヲ事

一
数是ヨリ日向ヲ後陣ヲ元正龍寺ヲ
一里程ヲ後陣取ル成ヲ程ヨリ物見
所ヲ一枝朱方ニ自注置作先手ハ鉄砲
中村孫平次塩尾茂助ヲ小四五人ヲ暫
ヲ乃ヲ出ヲ乃ヲ四五人ヲ石寄ハ注

行くべき所なく所々にて小屋あるを
と見へて悪徒屋敷を建て南地にま
さり京にまさるより日向守陣へ来る人乃往来
おびき寄有り共也日向守者の指に従入数を
尽夜々入在々の悪徒に出でし入敵陣に
物音を夜乃七ツ時分まで聞きよく聞き寄よ在
討を入ふだ海道筋へ軍兵押出を指しを
敵討と心得身を入来る指ちに紀家に
火をかけ焼上よ必家こみて火城かく屋

一

かくしたる紀家一ツうくを火先者見へ見
ゆれども是ハ相図ぞ乃ぞと聞えを中年
正龍寺に出でくに心を付よ火先
見ふ事ゆやうや夜ぞ近ゆよりくく
番に者を所々に畫の内鬮ハ夜討ハ大
略相所ぞ乃ぞこを紙ぞと出めたをかの
その也敵と一ツ指と見をを指ハ屋くをた
いも有きを指や味方ハ力ぞやよ出ぐを
きを三所ハ分へをを上具足ぞ左のをいかく

手もとにて見て と付させよ さて者ども者ども
は左様なりこれ毛刀のさや 弓 ぐ
と付させよ 彼者は 入 の
くと 仕 付 作 ㆑
一 楚 迄 ㆑ 供十騎 り 石速光秀夜
討 へ は道 紀海 ㆑ た ㆑ や
さ 弓 く 討 ㆑ 味方 ㆑ 鑓
二町 り 引 の 悪人数 備 人 立
相 ㆑ 猶 用 道具 下 伏 ㆑

よ 鉄炮 の 火縄 の 炎 不見 相 く 意 敵 の
人数二手 味方 分 通 過 一 所
を 鉄炮 討 よ 紀 城 の 追 せ 見 合
と 左衛門 兵衛 ㆑ 陣 の 意 ㆑
陣 所 へ 帰 被 ㆑
一 ㆑ 先手 大将 中村孫平次 所 早 歩
と 立 被 寄 仕 渡 次 日 合 義 山
侍 町 上 寺 迄 ㆑ 松 山 城
定 く 光秀 方 ㆑ 可 敵 不 先 ㆑ の

くはてハ松山をとられとれ申事なりはるれ
合戦のかちはあるハあの山を次第と覚事是
敵対れ山を取事ハ正龍寺に仕無事無
うをよりを横矢に討立ふ程あるハ人数を左
右押よせらるまきれり
孫三次郎ハ西ハ中ハ是迄れ申諸ふく
ハ座作武所意をを覚不申れ折くはれ松
山を昼日ハのくはをに元中をのうて先
ふ武をくを系ふを西中れ申一物れりを
ひりにを儀をくハ元れ敵陣をを見出をを也
松ハのりをを一物きぬしりをを山ハ分め
れをを置中れ物れをを松志郎をくを二三
十人ハ遠山乃ハ作ハあるをれをを二千間
程敵の可上と井刑き山人乃かをれ日を左
先をいくをも見をを中れ程はをを矢所と井和
しを取ハ元るかをを法郎を目尚所と可定と存
をれをを末乃枝くれ二町計ををる横切を
物の無味方の鉄炮乃目尚と定め置よく野

布と仕度に系て行くもの敵上る程なるハ右の
同前所に敵を引拔鉄炮矢先さかりとて討う
弟よと堅中付作昼日北軍と出利めされに
事見ゆ仕ふの仕油断なと事有候長谷
ゆも松山乃鉄炮をしまつたんをよと
御馬を乗ふ人別よ御用ゆをもをく私後
ゆ可所帰候と中上に安に御言ハは仕程無
殊所仕合や
孫平次ゆ行可程子をし敵討りやをき

と相ゆひ付正龍寺迄をゆ出ひと付
置に百姓のちに紀伊屋大をかけよ見ゆ
敵敵討北合戦に秀吉陣に敵討入ふと付乃
行一可上也をゆ敵討の西付のをかの事
仕度に共心得ゆをと御言ゆをやと
行作に整行よりの御前を立出馬屋へを
足入中以人をゆ御馬ハ油断ふくをひとかく矢
置中作ゆ程よりを孫平次御旗本を先を迴り
女を出神野有まくと中度人ゆ跡無覺